

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目：特定領域研究

研究期間：2005～2009

課題番号：17083020

研究課題名（和文）日記および文集から見た宋元時代の東アジア交流と両浙地域の社会、経済

研究課題名（英文）The East Asian Exchanges and the Social and Economical Conditions in the Song and Yuan China by using the Materials of Diaries and Miscellanies

研究代表者

遠藤 隆俊 (ENDO TAKATOSHI)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：00261561

研究成果の概要（和文）：本研究は日記および文集を用いて、宋元時代における東アジア交流の実態および寧波をはじめとする両浙地域の社会、経済問題を解明することを目的とした。併せて日記や文集の史料性について、比較史の視点から考察を加えた。宋元時代の両浙地域は東アジアの国際交流において重要な位置を占めていたのみならず、中国においては経済の先進地帯でもあった。本研究ではまず日本僧や高麗僧が書き残した日記や文集、宋元地方志、石刻資料などを用いて、外国僧の入宋に関する問題を解明するとともに、寧波、紹興、臨安など都市を結節点とする両浙社会の構造や流通の問題を明らかにした。またこの地域に隣接する江北や安徽、河南地区の実態を解明することにより、両浙地域のネットワーク形成およびそれと東アジア海域交流との関係を考察した。

研究成果の概要（英文）：We solved the two problems of Song and Yuan China by using the materials of Diaries and Miscellanies. One problem is the exchanges among China, Japan and Korea, and the other is the social and economical conditions of South East China. First we investigated the Japanese and Korean diaries to solve the problems of the immigration in Song China. Secondly we investigated the regional materials and inscriptions to analyze the conditions of cities and distribution structure in South East China focusing on Ningbo, Shaoxing, Lin-an and Suzhou. The South east China was the most important area in Song Yuan China not only on the international exchanges but also on the economical development. We considered the relationship between the East Asian exchanges and the economical power of South East China.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	4,900,000	0	4,900,000
2006年度	6,200,000	0	6,200,000
2007年度	6,200,000	0	6,200,000
2008年度	5,900,000	0	5,900,000
2009年度	5,800,000	0	5,800,000
総計	29,000,000	0	29,000,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：東アジア交流、日記、文集、宋元時代、両浙地域

1. 研究開始当初の背景

本研究は、特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成－寧波を焦点とする学際的創生－」（代表者：小島毅、東京大学）の専門研究班に属するものである。メンバーとしては、高知大学と愛媛大学の研究者を中心に、海外からの研究協力者で構成されている。この共同研究を開始した背景は次の通りである。

(1) 高知大学と愛媛大学は同じ四国内にある大学として交流があり、とくに宋元時代の研究者が多くそろっている。四国内では毎年「四国東洋学研究者会議」が開かれ、また全国では「宋代史研究会」が開かれて、毎年お互いに意見を交換していた。そのようなおり、両大学では、それぞれ日本僧・成尋『参天台五台山記』の読解を進め、宋元時代における東アジア交流史についての知見を深めていた。

(2) 一方、両大学の宋元史研究者は、みな両浙地域の社会や経済にも関心を持っていた。宋元時代の両浙地域は東アジアの国際交流に重要な位置を占めていたのみならず、中国においては経済の先進地帯でもあった。このような認識の下、両大学の研究者は、この地域の家族や宗族、都市、商人などについて、それぞれに研究論文を持っていた。

(3) 今回の研究は、特定領域研究の全体テーマと両大学の研究しているテーマが一致したため、両大学が共同で研究班を組み、新たな視点を模索しようということになった。お互いの知見を持ち寄り、共同で研究することで、より一層の研究の進展があるのではないかという点で意見が一致したためである。

2. 研究の目的

本研究は日記および文集を用いて、宋元時代における東アジア交流の実態および寧波をはじめとする両浙地域の社会、経済問題を解明することを目的としている。併せて日記や文集の史料性について、比較史の視点から考察を加える。宋元時代の両浙地域は東アジアの国際交流において重要な位置を占めていたのみならず、中国においては経済の先進地帯でもあった。

本研究ではまず日本僧や高麗僧が書き残した日記や文集、宋元地方志、石刻資料などを用いて、外国僧の入宋に関する問題を解明するとともに、寧波、紹興、臨安など都市を結節点とする両浙社会の構造や流通の問題を明らかにする。またこの地域に隣接する江北や安徽、河南地区の実態を解明することに

より、両浙地域のネットワーク形成およびそれと東アジア海域交流との関係を考察する。

3. 研究の方法

本研究の分析方法は大きく3つに分けることができる。1つは視点、視角、論点の形成、2つめは史資料の調査、収集、読解、分析、3つめは論点の再構築と研究会、シンポジウムの開催である。

(1) 視点、論点、視角の形成

本研究は宋元時代における東アジアの交流と両浙地域の社会、経済という2つの視点から研究を進めるものである。研究前にこれまでの研究課題を整理し、主に遠藤と大櫛、高橋俊が前者の東アジア交流を研究し、とくに日本と中国の間の交流について僧侶を中心に検討する。高橋弘臣と矢澤が主に両浙地域の社会経済について分析を進めることになり、都市問題や商人の視点から研究を深めることになった。

(2) 史資料の調査、収集、読解、分析

本研究は、主に文献研究であり、中国や日本に残されている文献史料から研究を進める。東アジア交流については、成尋『参天台五台山記』など日記史料や義天『大覚国師集』などの文集史料を用いて研究する。この版本調査や収集を日本、韓国、中国で行う。両浙地域の社会経済については、地方志や碑文史料を主に用いるため、中国における版本調査や石刻調査を行い、史料の収集に努める。収集した史料は各自が読解し、その結果をデータ集にまとめて分析する。

(3) 論点の再構築と研究会

東アジア交流については、日本僧侶の視点から見た中日関係や文書問題、日記の史料性について新たな見解を構築する。両浙地域の社会経済については、都市の下層民やモンゴルに使えた塩商人などの視点から、新たな地域社会像を構築する。その結果は、班内の研究会で報告するとともに、毎年シンポジウムないしセミナーを開いて公表する。

4. 研究成果

本研究では、日記および文集を用いて、宋元時代における東アジア交流の実態と寧波を中心とする両浙地域の社会、経済問題を解明することを目的とした。代表者の遠藤隆俊は全体の統括と日記および文集から見た東アジアの交流実態分析を担当し、分担者の大櫛敦弘はあわせて秦漢時代における日記、文献との比較検討を担当した。高橋弘臣と矢澤知行は主に文集や地方志から見た両浙地域の社会、経済分析を担当し、高橋俊はこれと

近代の比較検討を行った。この5年間で国際シンポジウムや国際セミナー、国内の研究会を23回開催し、著書2件、論文等53件、国際学会等での講演や口頭発表27件、海外調査18件に及んだ。以下、研究の成果を4項目に分けて報告する。

(1) 東アジア交流史

日本僧成尋の日記である『参天台五台山記』と高麗僧義天の『大覚国師文集』の検討を進め、入宋僧の状況と当該史料の性格について外交史料という視点から新たな知見を得ることができた。とくに『参天台五台山記』には50件近い宋代の公私文書が転載され、これが宋代東アジアの外交交流史に非常に裨益する史料であることが判明した。これを北宋時代の外国使節と宋朝の接待という視点から考察し、東アジア交流史研究に新しい視角を提供した。

(2) 日記の史料性

平成20年には京都の東福寺を訪問し、この日記の鎌倉古写本(重要文化財)を調査し、その内容や形態を分析した。また中国秦漢時代の日記、暦譜、日志を比較史的に分析し、これらの史料は個人が主体となって記録したという点で日記の萌芽的段階、すなわち『参天台五台山記』など後世の日記の前史をなすものであると論じた。その背景には、簡牘から紙へと変遷した書写材料の変化ならびに人々による「日常の発見」があったことも指摘した。

(3) 両浙地域の社会経済

寧波、臨安、紹興などの都市を結節点とする両浙社会の構造や流通の問題については、上奏文や地方志、碑文を手がかりに臨安の都市問題を考察し、両浙地域における社会実態について再検討した。臨安は南宋の国都であり、国都の建設から住宅事情、下層民の問題、城外の人口増加と都市領域への包摂、城外に対する治安維持制度、防火・消火制度、賑恤等の救済活動、税役の賦課等の措置、臨安の地方志などを包括的に論じた。さらに国都に駐屯する禁軍の種類・部隊名・定員・軍営の場所や、駐屯の経緯等を明らかにし、東アジア交流の受け皿となった臨安の様子を解明した。

(4) モンゴル時代の江南地域

中国江南地域に残されたモンゴル時代の碑文を調査し、石刻資料の収集と水運・海運に関わる研究史の問題点を明らかにした。また元代の両淮・両浙地方における漕運のルートや拠点、塩場の分布などを整理して提示するとともに、墓誌銘を中心とする文集史料に依拠しながら、王良ら地方の実務

派財政官僚の動向を紹介した。さらにモンゴル元朝における東アジア交流と地域ネットワークについて研究し、モンゴル部将や帝室、色目人財務官僚が両浙地域での権益確保をめざしており、ここが「海陸接合」の場であったこと、また元朝支配下の両浙社会において一定の政策論議を許容するような自律性が保障されていたことを指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計53件)

- ① 矢澤知行、元代の漕運・塩業と両浙社会、大阪市立大学東洋史論叢、査読無、別冊特集号、2009、37-48
- ② 高橋俊、修養する青年たち——『生活週刊』と新しい労働観の生成——、野草、査読無、第83号、2009、63-83
- ③ 高橋弘臣、南宋臨安的禁軍研究序説、南宋史国際学術研討会暨南宋定都臨安(杭州)870周年記念会論文集上、査読無、2008、115-123
- ④ ボヤンデルゲル、17世紀モンゴル編年史書におけるモンゴル大カンの家系・年代等の記載およびその来源、資料学の方法を探る、査読無、第6号、2007、22-35
- ⑤ 遠藤隆俊、義天と成尋、大阪市立大学東洋史論叢、査読無、特別号、2006、45-60
- ⑥ 高橋弘臣、南宋の国都臨安の建設—紹興年間を中心として—、宋代史研究会研究報告集 査読無、第8集 汲古書院 2006 173-209
- ⑦ 苗書梅、宋代明州における地方官僚体制研究、高知大学学術研究報告、査読無、第55号、2006、61-70
- ⑧ 大櫛敦弘、東方朔の「除目」—漢代官制史研究の一資料として—、『海南史学』査読無、43号、2005、41-61

[学会発表] (計27件)

- ① 大櫛敦弘、使者は境界を越えたのか—秦漢統一国家形成の一こま—、中国四国歴史地理学協会、2009.7.5、愛媛大学
- ② 高橋弘臣、南宋臨安的禁軍研究序説、南宋史国際学術研討会暨南宋定都臨安(杭州)870周年記念会、2008.10.20、中国浙江大学
- ③ 高橋俊、修養の先に——雑誌『生活週刊』と都市中間層の生成、中国文芸研究会夏期合宿、2008.9.2、奈良吉野
- ④ 矢澤知行、元代の水運・海運と両浙社会、国際シンポジウム「東アジア海域世界における交通・交易と国家の対外政策」、2008.2.3、大阪市立大学
- ⑤ 高橋弘臣、南宋臨安城外における人口の増大と都市領域の拡大、中国四国歴史学地理

- 学協会大会、2007.6.3、広島県立大学
- ⑥矢澤知行、元代兩淮地方の水運と塩業 ～墓誌銘などを手がかりとして～、国際ワークショップ「墓から見た中国、日本の基層社会」、2007.1.23、高知大学
- ⑦遠藤隆俊、義天と成尋、国際シンポジウム「文献資料学の可能性」、2006.1.26、大阪府立大学

[図書] (計3件)

- ①遠藤隆俊・平田茂樹・浅見洋二、汲古書院、日本宋史研究の現状と課題、2010、463
- ②平田茂樹・遠藤隆俊・岡元司、汲古書院、宋代社会の空間とコミュニケーション、2007、410
- ③井上徹・遠藤隆俊、汲古書院、宋一明宗族の研究、2005、536

[その他]

ホームページ等

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/maritime/>

平成17年度－21年度文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成－寧波を焦点とする学際的創生－」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 隆俊 (ENDO TAKATOSHI)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号：00261561

(2) 研究分担者

大櫛 敦弘 (OKUSHI ATSUHIRO)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号：40201967

高橋 俊 (TAKAHASHI SHUN)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授
研究者番号：10380297

高橋 弘臣 (TAKAHASHI HIROOMI)
愛媛大学・法文学部・准教授
研究者番号：70284388

矢澤 知行 (YAZAWA TOMOYUKI)
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：60304664

(3) 研究協力者

ボヤン デルゲル (BOYAN DELGEL)
中国・内蒙古大学・教授

徐 仁範 (SEO INBEOM)
韓国・東国大学校・准教授

苗 書梅 (MIAO SHUMEI)
中国・河南大学・教授